月刊シニアビジネスマーケット

超高齢社会のライフスタイルをデベロップする経営情報誌

SENIOR BUSINESS MARKET

2016
March
no.140

03

［特集］

一億総活躍社会

——「介護離職ゼロ」政策をどう読む

［連載対談］町亞聖がその素顔に迫る

リーダーたちの肖像

—Asei Meets Senior Market Leaders—

03. Tadamichi Shimogawara

ゲスト
下河原 忠道 氏
【㈱シルバーウッド 代表取締役】

インタビュアー
町 亞聖

介護保険制度施行から15年。シニア・ヘルスケア業界を牽引する経営者や第一人者たちは、いかにして現在のポジションを築いたのか。日頃の取材活動では聞くことのできない、彼らの知られざる人となりに、自身も両親の介護経験をもつ、フリーアナウンサーの町亞聖氏が鋭く切り込む。今回のゲストは、入居者の自立支援を促す「自由」「自立」を尊重した住まいづくりを実践する、シルバーウッドの下河原忠道氏にご登場いただいた。

デンマークに学んだ自立・能動型の高齢者住宅

町●下河原社長とは、一昨年くらいからいろいろな勉強会や会合でご一緒する機会も多いのですが、あらためてこうしたお話しする機会をいただけたことをうれしく思っております。

もともとは介護とは縁のない、建築関係のお仕事をされていたとうかがっております。この業界に足を踏み入れるきっかけはなんだったのでしょうか。

下河原●「スチールパネル工法」という、当社オリジナルの工法技術を使って、建物の構造躯体を販売する仕事をしていました。この業界と関わるようになったのは、5年前に千葉県鎌ヶ谷市の社会福祉法人の理事長がもつ土地の有効活用事業として、現在のサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）の前の制度の高齢者専用賃貸住宅の建設を提案しました。当初はそのオーナーさんが建物を建てて、運営事業者に一括でお貸しする計画だったのですが、オーナーと運営事業者との折り合いが悪く破談になってしまいました。どうしたものかと困っていたところ、オーナー側から「高齢者住宅がそんなに『いい』ものなら、自分で運営して示してみろ！」と言われ、こちらも後先考えずに「わかりました」と言ってしまい退けなくなりました（笑）。

ですから、参入当時は「ただの高齢者向けの賃貸住宅だろう」くらいの軽い気持ちで、他の経営者の方とは異なり、立派な理想や志をもってこの事業に臨んだわけではなかったのです。

町●そうだったんですか。では介護事業をはじめるにあたって、何か参考にされたことはあったのでしょうか。

下河原●建築の仕事で1度、療養病床を視察したことがあったのですが、そこでの光景が強烈でした。チューブだらけの高齢者がベッドに縛りつけられ、悲痛な叫び声が施設中に響く……「これはいったいなんなんだ、こういう状況をつくってはいけない」と感じました。

そこで、国内にお手本を求めるのではなく、まず海外から学ぼうと北欧のデンマークに視察に行きました。

デンマークの高齢者住宅は「プライエボーリ」と呼ばれる自立・能動型の暮らし方が主流です。朝からワインを飲んで、異国からの訪問者にも笑顔でハグをしてくれるなど、入居者の方の生活の自由度がきわめて高いのが特徴です。日本で見た療養病床の光景よりも「こっちのほうが絶対いいな」と素直に思い、「自立」「自由」を尊重した高齢者住宅をつくりたいと考えるようになりました。

町●介護保険制度をつくるとき、北欧に倣った部分も多いと思うのですが、日本はどうしても「ハコモノ」「管理型」になって、自由や自立を尊重する概念までは輸入できなかった。

下河原●視察を経て、そんな強い意気込みで「銀木犀」（ぎんもくせい：シルバーウッドのサ高住ブランド）事業を開始しました。オープン3カ月で満室になりましたので、経営的にはよかったのですが、入居される方はみな要介護状態で、なかには入居の当月に亡くなってしまうかもしれない重度の方もいるなど、最初にイメージしていた「元気な方に自由に暮らしていただく」というものとは大きくかけ離れたものでした。

認知症の方もおりましたので、当時は外に出て事故があってはいけないと玄関を施錠していたのですが、認知症の入居者の方が2階の窓から降りようとして、消防車が駆けつけるといった騒動もありました。社長は介護の素人で、一気に満室になってしまったので、職員の教育も追いつかず、いま思えば当時の運営はめちゃくちゃでしたね。

町●それでも、当初からの「自由」や「自立」を尊重する理念を貫き通してこられたわけですね。

下河原●そうですね。銀木犀に入居いただく方に一番最初にお話しするのは、「施設ではない」ということです。施設は「管理する」場所であり、管理は依存を生む。われわれは入居者の方に依存してもらいたくないのです。ご家族も同様です。「ここへ預けたらもう安心」という考えでは困るとはっきり申し上げます。基本的なサポートはしますが、主役はご入居者でありご家族です。高齢者の住まいというと「なんでもしてくれる」というイメージがありますので、その既成概念を取り払ってもらい、入居後もご家族は積極的に関わっていただくようお願いしています。

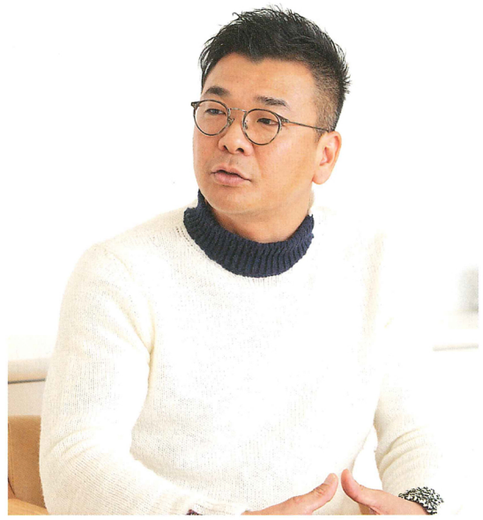
町●どうしても身内の介護を第三者に委ねる、つまり施設や住宅に預けることをいまだに「うしろめたい」と思ってしまう傾向にある。日々の取材でも「（親を）施設に入れてしまった」という表現をされるご家族にたびたびお会いします。介護保険制度がはじまって16年にもなるのに、まだいろいろな意味で家族の意識が変わっていないのも日本の介護の大きな課題だと感じています。施設を選択しても家族にできる役割があるのに、関わり自体を避けようとしてしまう。ですから、住まいを提供する側が、高齢者の方が自ら「ここで暮らしたい」と思ってもらえるような空間をつくり、そうした場所がふえてくれば、家族の意識やイメージも変わってくるのではないでしょうか。

その点、銀木犀は床がヒノキの無垢のフローリングで、以前、他の銀木犀にもおじゃましましたが、インテリアデザインも機能性とスタイリッシュが共存して、高齢者以外の方も「ここで暮らしたい」と思えるような遊び心が溢れた素敵な空間になってますよね。

下河原●見るもの、ふれるものは人間の五感に与える影響も大きいですから、インテリアや建築というのは高齢者の方の住まいにはとても大事なことだと思っています。

内装やデザインだけではありません。食事ひとつとっても、誤嚥防止などの医

高齢者住宅は、高齢者が自由に選択して生活を楽しむ場所であるべきです［下河原］



下河原 忠道（しもがわら・ただみち）
1971年東京都生まれ。92年より父親が経営する鉄鋼会社に勤務、薄鋼板による建築工法開発のため、98年に単身渡米。「スチールフレーミング工法」をロスアンゼルスのOrange Coast Collegeで学び、帰国後2000年に㈱シルバーウッドを設立。「スチールパネル工法」を開発し特許を取得、国土交通省より大臣認定を受け、耐震性に優れた住宅・店舗等の設計・施工を行なう。05年にはじめて高齢者向け住宅工事を受注後、11年7月にサ高住「銀木犀＜鎌ヶ谷＞」を開設。介護予防を中心に看取り援助まで行なう終の住処づくりを目指し、「生活の場」としてのサ高住開発を追求する。一般財団法人サービス付き高齢者向け住宅協会理事。実妹は歌手の華原朋美さん。

療的見地から、細かく刻んだりとろみをつけたものを提供することがありますが、誰もそれを食べたいとは思っていないはずです。食事は生存期間を延ばすのが目的ではありません。極論になりますが、おいしいものを食べてポックリ逝くほうがいい。銀木犀では、よほど医師からの指示がない限りは、味のしっかりついた普通の食事を提供するようにしています。高齢者が自由に選択して生活を楽しむ場所、それが高齢者住宅のあるべき姿というのが基本理念としてありますね。

自立支援を促す〝放っておく〟介護

町●「自由」や「自立」を尊重した空間も素晴らしいのですが、もう1つ、サービス付き高齢者向け住宅でありながら、銀木犀では「看取り」、そして「お別れ会」をされている点にも驚かされました。

下河原●事業者側も必要以上にリスクを冒したくないので、何かあったらすぐに救急車を呼べと指示しているところがほとんどですが、銀木犀ではむしろ「救急車は呼ぶな」と指示しています。もちろん、単に呼ぶなといっているわけではありません。その背景には在宅療養支援診療所や外部の訪問看護ステーション、そして介護スタッフとの多職種による連携がしっかり確立されていることが前提です。そこを端折って「看取りをしています」というのは無責任すぎると思います。

一番はじめに看取った方は末期の乳がんの元看護師の方で、「最期の場所」を求めて銀木犀を選んでいただいたのですが、一切の治療を拒み、最期まで「痛い」という言葉を言わずに息子さんの腕に抱かれながら亡くなられました。

変な言い方かもしれませんが、素直に「かっこいい」と思いました。最初にそうしたシーンに遭遇できたことは、高齢者住宅事業を続けていくうえでの大きな動機づけになったと思います。いまでは入居者の9割の方が最期を銀木犀で迎えたいと希望されています。

話は変わりますが、その方はとても自立心の強い方で、食事も水分もご自身で摂取できなくなり、医師からも腎機能が弱まっていると聞いていたので、ゼリー状の水分を無理にでも摂っていただこうとしたのですが、「しつこい」と言って拒否されました。そのときに、「ああ、こちらの都合を押し付けるのは間違いなんだな」と実感しました。ただ嫌われてただけかもしれませんが……（笑）。しかし、この出来事から要介護状態になっても「自由」「自立」を尊重することの大切さを学びました。

町●本来は生活の場であり、自立して暮らすことが目的の高齢者施設や住宅はいつから「なんでもやってあげる住まい」になってしまったのでしょうか。ホテルのようにコンシェルジュがいて、至れり尽くせりのサービスがどんどんエスカレートしている気もします。

下河原●「自分でできることは自分でやってもらう」、それが自立支援につながっていく。私の介護の基本スタイルは「入口まで招待して、あとは放っておく」です。スタッフがしてくれなければ、入居者同士で助け合う自助作用も生まれ、より堅固な入居者間コミュニティが形成される。スタッフは最小限のサポートでいいのです。語弊はありますが、「厳しい介護」――うちはこれからこれをモットーにしたいと思います！。

理念や志も「経営」があってこそ「満室経営」が最上の喜び

町●介護の仕事を行なうなかで、感動したエピソードはありますか。

下河原●どちらかというと、経営者としての視点が強いので、あまりお涙頂戴の話はありません。「満室経営」が経営者としての一番の喜びです（笑）。しっかり利益を出し、余裕をもって事業継続ができる状態でなければ立派な志や夢も実現できませんから、介護・福祉とはいえ、経営という部分はとても大切です。最近では、半年前に東京都足立区という高齢者住宅が乱立する超激戦区にサ高住をオープンしたのですが、そこの満室のめどが立ったことがうれしかったですね。

いまはおかげさまで高齢者住宅事業が軌道に乗って、それなりに収益を生み出していますが、それだけで終わらせるつもりはありません。もちろん、従来からの建築事業もありますし、さまざまな事業をトータルでみながら企業として収益を出していくことが理想です。現在は理化学研究所との産学連携による、バーチャルリアリティを活用した認知症の真の理解につなげる事業にも関心をもっています。ですから、介護報酬がどうのと一喜一憂することもありません。

また、これはまだ正式発表ではないのですが、ある場所でシェアハウスとサ高住、小規模多機能を一体的に整備する、まちづくり型のプロジェクトが進行中です。1階に屋台やファーマーズマーケットなど、地域の人も集まれるようなピロティをつくり、シェアハウスの入居者と高齢者、合わせて地域との交流が図れるような空間にしたいと思っています。個人的には高齢者住宅事業の1つの完成形を目指しています。

町●それはとても楽しみですね。究極の介護は地域をデザインして、街をつくってしまうことだと思います。介護施設や高齢者住宅も閉ざされた空間ではなく、世代を超えた交流が生まれ、そしてコミュニティの核になる場所になってほしいです。1階が店舗、2階が住居という昔の商店街のように、生活の営みと密接につながることで地域の活性化にもなるのではないでしょうか。

最後に、下河原さんは客観的にご自身をどんな人間だと思われていますか。

下河原●「中途半端」でしょうか？。なので、1つくらい最後までやり抜こうと常に自分に言い聞かせてます。いろいろな事業に目が向いてしまうのも、浮気性といいますか、目移りしてしまう。でも気づけば、建築工法で15年、サ高住事業も4年が経過していました。われながら結構真面目にやってるなと感心しています。一方で、「あきらめが悪い」ところがありますので、その事業が成功するまでやる、という一面も併せ持っています。

町●中途半端では全然ないと思いますが、そうした自身への厳しい評価が継続の原動力になっているのではないでしょうか。下河原社長をはじめとした、介護オンリーではない視点をもつ次世代の方たちが、この業界に新たな風を吹き込んでくれることを期待しています。今日はありがとうございました。

ここで暮らしたいと思える住まいがふえれば家族の意識やイメージも変わってくるのでは［町］

町 亞聖（まち・あせい）／**フリーアナウンサー**
1995年に日本テレビにアナウンサーとして入社。その後報道局に異動し、報道キャスター、厚生労働省担当記者としてガン医療、医療事故、難病などを取材。2011年にフリーに転身。脳障害により車いす生活だった母と過ごした10年の日々、母と父をがんで亡くした経験をまとめた著書『十年介護』（小学館文庫）を出版。医療と介護を生涯のテーマに取材、啓発活動を続ける。厚生労働省の「介護人材確保の推進に関する調査研究・検討委員会」委員。出演番組はTOKYO MX『週末めとろポリシャン！』、文化放送『大竹まことのゴールデンラジオ！』水曜レギュラー、ニッポン放送『ウィークエンドケアタイム「ひだまりハウス～うつ病・認知症を語ろう～」』。
（町 亞聖公式ブログ→ http://ameblo.jp/machi-asei/）

インタビューを終えて

私と下河原さんにはいくつかの共通点があります。まず同い齢であること、そして自分で言うのもなんですが……外見からは介護に関わるタイプの人間には見えないこと（笑）。そしてお互いに介護や医療のプロではないということです。だからこそ既成概念にとらわれずに「おかしいことをおかしい」と言えるのが強みだと感じています。

管理する介護や過剰なケアを排除した「銀木犀」には、そこに暮らす人々が自ら楽しみ生き甲斐を見つけることができる“アイデア”と“遊び心”が溢れています。技術革新や介護者の働き方の工夫だけが介護のイノベーションではなく、これから求められるのは下河原さんのように高齢者を「主役」とした新しい価値観を創造していくことだと確信しました。（まち）